医学部へ行こう！
GO FOR MEDICINE

主催：朝日新聞社メディアビジネス局
特別協賛：リソー教育グループ 名門会 家庭教師センター

紙上採録

# 医師を志す中高生のための 医学部進学ガイダンス

8月25日、東京・イイノホールで本紙広告特集「これからの医学部受験」の特別イベント「医師を志す中高校生のための医学部進学ガイダンス」が開かれた。多くの中高生と保護者が訪れ、自らのがん体験をきっかけに医師の道へと進んだ松井基浩氏の講演や、医学部受験のプロが語る最新の受験事情などに聞き入った。

## 第1部

## 小児医療の最前線にて ～僕が医学を志した理由、そして未来へ～

東京都立小児総合医療センター
血液・腫瘍科
**松井基浩**氏

まつい・もとひろ／1986年大阪府生まれ。高校1年で悪性リンパ腫に。8カ月の入院生活の後、復学。入院治療を受けながら浜松医科大に現役合格。在学中の2009年に患者団体「STAND UP!!」を設立した。国立国際医療研究センターなどを経て、16年4月から東京都立小児総合医療センター血液・腫瘍（しゅよう）科に勤務。19年血液・腫瘍科サブスペシャリティレジデント修了、同医員。

### 自らもがんを経験し医師への道を志す

私は公立の小学校で1年生のときからサッカーをしながら、中学受験を目指して塾に通っていました。受験はどうだったかというと、5校受けてようやく桐蔭学園に合格しました。中高一貫校なのでそのまま高校へ進みましたが、この頃はまだ医学部を目指していたわけではありません。

しかし高校1年のときに転機が訪れました。がんに侵されてしまったのです。家の近くの病院でがんと診断され、翌日改めて国立がん研究センター（東京・築地）へ行くと、がんは「Tリンパ芽球性リンパ腫」というもので、8カ月ほど入院すれば治るという説明を受けました。「治る」という言葉が何よりもうれしかったのを覚えています。

入院当初は「なんで自分だけがこんな目に」と心を閉ざしていました。でも自分より小さい子どもたちが、ちゃんとがんという病気を受け止め、明るく前向きに闘病しているのを見て、私も前を向いてがんと闘おうと決めました。「がんの子どもを支える医師になりたい」と思うようになったのも、彼らの姿を見たのがきっかけです。8カ月の入院生活を終え、ようやく復学したときは、医学部受験に向けてやる気十分でした。

しかし、抗がん剤治療が続くなかでの受験勉強は非常につらいものでした。復学したのは高校2年の2学期からだったのですが、院内学級で勉強していたとはいえ、やはり学校の授業にはついていけません。医学部受験の塾に入ろうにも、入塾テストで門前払いされてしまう状況でした。

そんな私を救ってくれたのが、がん研究センターで闘病中の友人たちです。彼らが「絶対医者になれ」「がんを経験したお前にしかできないことがある」と励ましてくれたことで、私も「今も闘病しているみんなの分までがんばろう」と思えるようになったのです。

それから受験までの1年弱は、すべての力を医学部合格のために注ぎました。抗がん剤で体調の悪い日は寝る、学校での友人関係はあきらめると決め、起きている時間のすべてをひたすら勉強に費やしました。おかげで浜松医科大学に合格でき、今の自分があるわけです。

### 医師という仕事には無限の可能性がある

医学部に合格するために必要な要素は「才能」「努力」「精神力」だと思います。とはいえ私に特別な才能があったわけではありません。学力は偏差値50ぐらいの真ん中だったと思います。ただ、努力の大切さは小学生時代のサッカーで学んでいましたし、がんという転機を経て精神力も身についていました。また、私の場合は何より闘病期間に抱いた「医師になりたい」というモチベーションが武器になりました。しかし、医学部合格に必ずモチベーションが必要かといえば、そうではありません。才能に恵まれている人、ただただ勉強が好きという人は、それだけで十分チャンスがあるでしょう。

しかし実際に医師として働くとなると「患者さんと向き合うプロになる」「研究の分野で治療に役立つ発見をする」「医師だからできる社会貢献に注力する」などのモチベーションが必須です。そしてしっかり仕事と向き合えば、それぞれに無限の可能性があるのが医師ではないかと思っています。いまモチベーションがないという人も、医学部生から研修医までの期間で多くの患者さんと出会い、実際の医療に触れて動機づけをする機会はたくさんあります。自分がやっていくことのその先にいる多くの人の幸せに向けて、皆さん本気で医師を目指してください。

## 第2部

## カギを握るのは「得点力」 ～早い準備と実戦演習の徹底で現役合格へ～

名門会家庭教師センター
医学部受験指導責任者
**鈴木 博**氏

すずき・ひろし／京都大学卒業。2019年度医学部入試234人の合格実績をもつプロ教師集団「名門会」の教務責任者。特に医学部合格戦略に精通し、生徒一人ひとりの医学部合格カリキュラム作成のノウハウをもとに、「医学部に強い名門会」を確立している。

### 小・中学校のうちに勉強の習慣づけを

どんな入試も一夜漬けは通用しませんから、毎日一定時間勉強に集中できる忍耐力を養う必要があります。長期記憶を確かなものにするにも繰り返しの学習が最も有効ですから、小・中学生のうちに学習習慣を身につけることが大切です。勉強だけでなく、本を読む、映画を見る、部活やサークルに参加するなどし、人間の幅を広げ柔軟な発想を身につけることも重要です。

科目別の話をしますと、まず英語に力を入れていただきたい。中学生のうちに単語が頭に入っていないとどうにもならないので、ここはがんばってほしいと思います。文法については高校1年までに身につけるのが理想ですね。英語は学力が得点に直結しやすいので、医学部受験に限らず大事な科目といえます。

もう一つ大切なのが国語です。入試問題を見ると分かりますが、理科の実験考察問題の中には問題文だけで1ページを超えるものもあります。これを1回読んで理解できるか、そうでないかは、時間と心の余裕の面で大きな差になります。基礎的な読解力は高校1年の段階でほぼ決まりますから、国語力を早くから養いましょう。

それから歴史や地理。英語や国語の試験で社会科とリンクする問題が出題されたとき、背景となる知識があるかないかで理解力が圧倒的に変わります。これらの科目は余裕のある中学生のうちからしっかり勉強してほしいですね。

### 本番で実力を出せる「得点力」を磨こう

ここまでは学力向上のための話をしてきましたが、どんなに学力があっても入試で実力を発揮できなければ合格はできません。入試では、自分の学力を効率的に運用し、試験の制限時間内に合格ラインを上回る点数を取る「得点力」も必要になります。

具体的にはまず、難問を識別して後回しにする、問題の取捨選択が必要です。これを瞬時にできるか否かは、演習量で決まります。問題を解きながら時間配分や取捨選択の判断力を磨き、合格ラインをクリアするための学習は、受験校の過去問を用いて行うのが最も効果的ですから、その期間を十分確保するために志望校を早く決めましょう。そして高校2年の終わりまでに単元学習を終え、春休みから過去問演習を始めるのが理想です。

医学部入試の出題傾向は「標準的な問題に加え難問も出題される（A）」「問題は難しくないが合格ラインが高い（B）」「問題は難しくないが出題数が多い（C）」と大きく3パターンに分けられます。Aに該当するのは、私立の難関校、国公立では医学部単科大学を中心とした「2次ボーダー」（合格最低点からセンターB判定ラインの得点を引いた2次の得点率）が低い大学で、標準問題を確実に正解しつつ、難問でも部分点を取れるような対策が必要です。Bは他学部との共通問題が多い国公立の総合大学に多く、標準レベルの問題をミスなく確実に解くことが求められます。Cは中堅私立に多いパターンで、処理能力を高めるトレーニングが必要です。

最後に入試直前期にやるべきことですが、苦手な単元や弱点は秋までに克服しましょう。また、新しいことには手をつけず、繰り返し学習で知識の劣化を防ぐことに力を注いでください。そして試験の時間割に合わせた演習で受験体力を強化しておいてください。出題傾向の変化に耐えられるよう、受験校以外の過去問もやっておきましょう。

皆さんが持つ可能性を最大限に伸ばすことで、誰にでも合格のチャンスは生まれます。ぜひ夢を実現してください。